

## 進捗状況の概要（1ページ以内）

【学内の実施体制】学長のリーダーシップの下、APプロジェクト委員会を設置し、全13学部および関係機関（キャリア・入試等）と連携して本事業を推進している。教育推進部長（副学長）が事業の全体を把握し、教育推進委員会を通じて全学部に報告・審議・承認等を行う体制を構築している。

## テーマⅠ アクティブ・ラーニング

【中心となる取組】生涯に亘って創造的な思考と責任ある行動を実践し続ける考動人を養成する考動力育成プログラムをLA等の多くのピア・サポーターの支援を得て実践し、社会人と共に企画する交渉学ワークショップ（以後、交渉学WS）を軸に「大学生の将来」を見据えた能動的学修を実現するとともに、「将来の大学生」である高校生の参加も視野に入れた高大連携を展開する。

【取組の成果】能動的学修を不可欠とする考動力育成プログラムを担う科目、担当教員、受講学生のいずれもが増加し、基盤が拡大・充実している。能動的学修等を支援する学生スタッフの裾野が広がり、LA・SA・TAスタッフ等を含む29団体約1300名の学生がPAL（Peer Assisted Learning）を基盤とした準正課教育プログラム（仮）を中心として担っていく体制が整った。また、リーダーシップの涵養が大学間で連携して実施されるようになってきている。社会人あるいは高校生を交えた交渉学WSが継続して開催され、学生のプロジェクト・マネジメント力が育成されている。

【補助期間終了後の継続発展に向けた取組】能動的学修を支援する学生スタッフの交流が大学の壁を超えて広がり、相互に学生・教職員が往来して、情報の共有や創造が始まっている。このつながりをさらに拡大していくため、PALフォーラムを定期的に開催する。交渉学WSについては複数の企業等とのコラボ開催を継続するとともに、高校とのコラボ企画の裾野を広げ、中学生の参加も視野に入れる。

【学内外への波及効果】能動的学修を支援する学生スタッフ制度が複数の大学に導入され、本学との交流が深まるなか、同種の制度を持つ大学複数校が一堂に会してシンポジウムを開催し、次の会場校も決まる等、PALの裾野が確実に拡大している。企業とコラボする交渉学WSは安定している。高校とのコラボも安定するなか、中学生対象の同種企画を望む高校生が増えている。

## テーマⅡ 学修成果の可視化

【中心となる取組】教学IRプロジェクトが4年目となる平成29年度は、前年度に引き続き質向上に取り組んでいる学士課程教育のアセスメントデザイン（入学前（併設校）、入学時、パネル、卒業時、卒業後調査による各種学生調査＋授業・プログラムルーブリック）に加えて、大学院の調査デザイン（入学時、修了時）が完成した。また考動力コモンスルーブリック（暫定版）を学生調査の結果とすり合わせし、完成に向けて調整を行った。特に該当年度は昨年同様に初年次教育に焦点を当て、メタルーブリックを作成した。特に学部のみドルレベルのアセスメントを担った事例として経済学部のカリキュラム改革がある。ライティングラボと協働し、アセスメントと教育改革の連動を行った。またアセスメントの結果を部局構成員に周知する方策を多く行ったが、特に学生には考動力コンピテンシーに関して個別にフィードバックするシステムを開発した。

【取組の成果】本取組が目指すドルレベルのアセスメントデザイン（直接評価＋間接評価）は学内APにより徐々に広がり、現在、13学部中、11学部とアセスメントに関して協働体制を組んでいる。学部のみならず、全学においても、習熟度別全学英語教育の成績の標準化（IRTによる）等を行った。また学生調査では、入学時、パネルに関しては、ほぼ100%の記名回収率を達成したことから、大規模大学で行うことの意義は大きい。その結果は、各学部教授会で全教員に報告するだけでなく、大学執行部や法人部局に報告するとともに、SDや新任教員・職員研修などにも利用されている。また抜粋版ポスターで学生にも周知しており、本学の現状について全構成員の共通認識を促進している。

【補助期間終了後の継続発展に向けた取組】教学IRは、これまでドルレベルの内部質保証に注力していたが、マクロレベルとして大学全体のアセスメントも強化するため、学長下の教育組織として改変する方向で検討されている。また今後、各学士課程教育においてアセスメントポリシーを作成することで、本取組が教学IRの組織化に至り、内部質保証システムに組み込まれた。

【学内外への波及効果】ドルレベルの内部質保証をターゲットにした取り組みは国内でも珍しいことから、府大、市大との合同FDフォーラムで事例報告した以後は、多くの大学から問い合わせがあり対応をしている。